慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮坂敬造略歴・主要研究業績
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.77 (2014.) ,p.225- 245
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2013年度定年退職者略歴・著作目録一覧
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000077-0225

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮坂敬造　略歴・主要研究業績

生年月日　1949年3月28日（満64歳）

[学歴]

1972年3月　東京大学　教育学部　教育心理学科専修課程卒業
1972年4月　東京大学　教育学研究科　教育心理学専修修士課程入学
1975年3月　東京大学　教育学研究科　教育心理学専修修士課程修了
1975年4月　東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所研究生（一年間）
1976年4月　東京大学　教育学研究科　教育心理学専修・博士課程入学
1980年5月　同上・中退〔大阪大学・就職のため〕

[職歴]

（常勤職）
1980年6月　大阪大学人間科学部 人類学講座助手（1986年3月まで）
1986年4月　慶應義塾大学文学部人間科学専攻助教授
2000年4月　慶應義塾大学文学部人間科学専攻教授（現在に至る）
（非常勤講師）
1981年4月～1983年3月　桃山学院大学文学部 非常勤講師
1982年4月～1985年3月　立命館大学産業社会学部 非常勤講師
1983年4月～1984年3月　奈良県立医科大学非常勤講師
1987年4月～1988年2月　埼玉大学教養学部非常勤講師
1988年7月　大阪大学人間科学部（集中講義）
1990年4月～1991年2月　埼玉大学大学院 非常勤講師
1994年4月～2000年7月　慶應義塾大学看護短期大学塾内出講
（客員研究員）
1984年 8月～1984年12月　Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University
1985年10月～1985年11月　Japanese Studies Centre, Clayton
1992年 4月～1994年 3月　Northrop Frye Centre, Victoria University in the University of Toronto
【塾派遣留学】
2004年4月～2005年3月　McGill University, Div. of Social and Transcultural Psychiatry & Dept. of Social Studies of Medicine

[塾内のその他の業務]

1996年10月～現在　慶應義塾大学アートセンター所員（兼任）
1997年10月～2002年9月　大学通信教育部学習指導副主任
1997年10月～1999年9月　大学教職課程ｾﾝﾀｰ学習指導副主任
2001年4月～現在　慶應義塾大学社会学研究科委員

2007年 4月～ 2012年3月　慶應義塾大学人文グローバルCOE 論理と感性の先端的研究拠点・哲学文化人類学ユニット・リーダー
2012年4月～現在　論理と感性のグローバル研究センター（キックオフ）文化人類学研究員

［国内共同研究員等］
1980年4月～ 1992年3月　国立民族学博物館研究協力者
2009年4月～ 2011年3月　京都大学こころの未来研究センター連携研究代表
2011年4月～ 2013年3月　国立民族学博物館館外研究員

［所属学会および国内共同研究員］
1986年4月～ 2004年 3月　日本民族学会会員（2004年日本文化人類学会に改名）
1991年4月～現在　日本記号学会会員
1996年5月～ 2000年 5月　同上監事
1992年5月～ 1997年12月　Toronto Semiotic Circle会員
2007年4月～現在　日本文化人類学会会員
2012年8月～ 2013年 3月　同上　関東地区研究懇談会幹事
2013年1月～ 2000年 6月　同上第47回研究大会実行委員会副委員長

［文学部におけるこれまでの担当科目］
（人間科学専攻）
人間科学研究法基礎，人間科学諸領域D，人間科学ワークショップ，日吉特論（人間科学），人間科学の諸問題，洋書講読，人間科学研究会，文化と精神病理，価値と人間行動，比較文化関係論，人間科学基礎，人間科学諸領域IV
（文学部共通科目，総合教育科目）
比較精神史，自我と意識，イマジネーションとイメージ，センスとノンセンス，コミュニケーション―疎通と不通，模倣と独創，20世紀のトップ100，ユートピアの期限，幸福の逆説，リスクの誘惑，情の技法I，蒐集の科学 I，蒐集の科学 II，愛とセクシュアリティ I，愛とセクシュアリティ II，死と再生 I，死と再生 II
（社会学研究科社会学専攻）
文化人類学学説特論，文化人類学学説演習
（通信教育部）
先進技術社会を生きる（総合講座コーディネーター），二〇世紀と「トラウマ」（同）

研　究　業　績　一　覧

1. 『象徴人類学』青木保編，「危機と象徴的メタファーの力――象徴人類学的メタファー研究の可能性」，共著，昭和59年（1984）3月，至文堂，全304頁（執筆章：88–108頁）.

2. 『文化人類学群像1―外国編』綾部恒雄編,「グレゴリー・ベイトソン―精神の生態学にむけての人類学的足跡」,共著,昭和60年(1985)5月,アカデミア出版会,全448頁(執筆章:367–390頁).
3. 『コスモスと社会――宗教人類学の諸相』吉田禎吾・宮家準編,「儀礼過程における反省作用再考一分析概念の位置と,事例を通して展開させる展望について」,共著,昭和63年(1988)6月,慶應通信,全467頁(執筆章:47–68頁).
4. *The Chinese expansion and the world today*. H. Kani, & T. Yamada, et al. "A Necessity for a New Model of Grasping the Potential Shifts in Networks and Identities of Mainland Chinese Immigrants.",共著,平成8年(1996)3月,Center for Area Studies,Keio University,全112頁(執筆章:pp. 67–78).
5. 『儀礼とパフォーマンス』岩波講座・文化人類学・第9巻,青木保ほか編,「言説と実践のはざまにあらわれる身体をめぐって」,共著,平成7年(1997)8月,岩波書店,全314頁(執筆章:269–314頁).
6. 『民俗宗教の地平』宮家準編,「関係のなかで紡がれる文化の新局面―民族伝統芸能交流会での「誤訳」からみえてきたこと―」,共著,平成5年(1993)3月,春秋社,全582頁(執筆章:529–552頁).
7. 『ユートピアの期限』坂上貴之・巽孝之・宮坂敬造・坂本光共編,「時間の架け橋――現代の〈未開/始原主義〉とユートピア境域成立の風景」,共著,平成14年(2002)7月,慶應義塾大学出版会,全403頁(執筆章:91–118頁).
8. *Gestures: Meaning and Use*. M. Rector, I. Poggi, & M. Trigo (eds.) "Unusual Gestures in Japanese Folkloristic Ritual Trance and Performances."(学会発表査読通過を元にした論文),共著,平成15年(2003)1月,Universidade of Fernando Pessoa: Porto, Portugal.(ISBN: 972-8184-95-6),全393頁(執筆章:pp. 293–300).
9. 『幸福の逆説』,巽孝之・宮坂敬造・坂本光,岡田光弘・坂上貴之共編,「戦争・戦争ゲーム・幸不幸の第二次学習――主観的幸福感の世界?」,共著,平成17年(2005)4月,慶應義塾大学出版会,全383頁(執筆章:245–285頁).
10. 『情の技法』坂本光・岡田光弘・坂上貴之・巽孝之・宮坂敬造共編,「フィクションに生きる後記」,共著,平成18年(2006)9月,慶應義塾大学出版会,全436頁(執筆章:426–430頁,5610字).
11. 『宗教をやどす映像,映像にうつる宗教』岩谷・新井・葛西編「映像人類学の理論と実践,その新たな展開の現在――デジタル映像技術の革新と新しい世紀の映像人類学の課題」,共著,平成23年(2011)6月,せりか書房(執筆章:249–275頁).
12. 『リスクの誘惑』宮坂敬造・坂上貴之・巽孝之・坂本光,岡田光弘共編,「高度情報化社会の揺らぎとリスクの変質,自己の変質をめぐる人類学的考察」,共著,平成23年(2011)9月,慶應義塾大学出版会,全306頁(執筆章:①序論,i–viii ②左記論文,8–30頁).
13. 『映像の共有人類学』村尾静二・箭内匡編,「文化を写しとることは可能か」(脱稿2013年10月),共著,平成26年(2014)4月,せりか書房.

(学術論文)

1. 「文化的コミュニケーション装置としてのことわざ」(査読付き),単著,昭和57年(1982)3月,『年報人間科学』,大阪大学人間科学部,No. 3, 133–165 頁.

2. 梶原景昭・宮坂敬造「セブ市のサント・ニーニョ信仰―フィリピン地方都市研究の可能性」（査読付き），共著，昭和58年（1983）12月，『民族学研究』，Vol. 48, No. 3, 379–386 頁，研究ノートとして掲載.
3. 「フィリピンの地方都市における都市フィエスタとその変遷」（査読付き），単著，昭和59年（1984）3月，『年報人間科学』大阪大学人間科学部紀要，Vol. 10, 107–133頁.
4. 「民族誌のアヴァンギャルド――人類学者ベイトソンのモノグラフと理論」（特集論文），単著，招待論文，昭和60年（1985）5月，『現代思想』〈特集ベイトソン〉，青土社，Vol. 12-5, 69–91頁.
5. 「写真による実験的民族誌―『バリ島人の性格』のコミュニケーション研究」，同上，昭和59年（1984）10月，『現代思想』青土社，Vol. 12-12, 230–249頁.
6. 「フィリピンの一地方都市における呪医の儀礼」（査読付き），単著，昭和59年（1984）11月，『南方文化』，天理大学南方文化研究所，11輯，27–48頁.
7. 「拘束と解放――儀礼論の原点」，単著，昭和60年（1985）4月，『現代思想』青土社，Vol. 13-4, 202–211頁.
8. 「文化人類学から文化記号論へ」（特集論文），単著，昭和60年（1985）6月，『数理科学』〈特集：記号〉サイエンス社，No. 264, 46–51.
9. 「儀礼におおわれた対人的相互作用―狂気と性の考察にみられるゴッフマンの儀礼論について」（特集学会招待論文），単著，昭和60年（1985）9月，『現代社会学』〈特集ゴッフマン〉アカデミア出版，Vol. 19, 64–104.
10. 「現代フィリピンにおける呪的医療とその変化――地方都市の事例からの研究ノート」（査読有り），単著，昭和61年（1986）3月，『年報人間科学』，大阪大学人間科学部，No. 7, 103–121頁.
11. “Roxas –A ‘Sari-Sari’ of Flows of Life: an Anthropological Note on a Cultural Framework of a Philippine Local City and its Market.”，単著，昭和61年（1986）3月，Osaka University. T. Aoki (ed.) Anthropological Study of Local Cities in Southeast Asia, Research Report, pp. 25–37.
12. 「部族・伝統社会の通過儀礼と現代社会への示唆―成人通過儀礼を中心として」（特集論文），単著，昭和61年（1986）5月，『青年心理』〈特集通過儀礼〉，金子書房，Vol. 59, part 2, 19–26頁.
13. 「バリの象徴と絵画の世界―ワヤン様式と1930 年代以降の絵」（特集論文），単著，昭和61年（1986）9月，『美術手帖』〈特集・バリ島の芸術〉美術出版社，Vol. 38, No. 567，42–57頁.
14. 「異界の体験と癒しの儀礼」（特集論文），単著，平成2年（1990）7月，『イマーゴ』青土社，Vol. 1–7, 56–67頁.
15. 「催眠，憑依，およびヒーラーのいる風景―変性意識論と文化人類学の新しい交点」（特集論文），単著，平成2年（1990）8月，『イマーゴ』青土社，Vol. 1-8, 190–210頁.
16. 「交錯する「エスノ芸術」――「伝統芸能」と「現代芸能」のあいだの共時的空間」，単著，平成10年（1998）4月，『アートセンター年報』，慶應義塾大学アートセンター，No. 5，4–9頁.
17. 「伝統文化と先進技術―芸術と遺伝子操作，機械・人間系をめぐる考察を通して―」，単著，平成13年（2001）11月，『三色旗』，慶應通信，No. 644, pp. 25–38頁.
18. 「他者性をめぐる学的言説の構図――ディアスポラとグローバリゼイションの時代の新しい他者像の局面」（査読付き），単著，平成14年（2002）7月，『三田社会学』三田社会学会，No. 7, 25–56頁.
19. 「心的外傷（トラウマ）」からの「二十世紀」への接近――総合講座「二十世紀と〈トラウマ〉」を

終えて」，単著，平成16年（2004）4月，『三色旗』慶應通信，No. 673, 40–44頁.

20. “Work Ethics? From a View of Anthropology: Batesonian Focus on Relevancy of Play Framing in the Evolutionary Scope of Prototypical Development of “Work-Ethics” in Small-scale Societies”，単著，平成16年（2004）3月〔上記は奥付，2003年が図書館記載〕，『人間と社会の探究　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』No. 57, pp. 11–26.
21. 「エスノ・アートの交錯再帰的変化とオーストラリア先住民系アートの一局面」，単著，平成19年（2007）4月，『アートセンター年報』，慶應義塾大学アートセンター，第14号，24–31頁.
22. “(Inter)cultural/Trans-cultural Lens on Plurality of Logical Cosmological Discourses, Emotions, and the Issues on Sensitivity: Exploratory Cultural and Medical Anthropological Approach”，単著，平成20年（2008）3月，Shigeru Watanabe（ed.）CARLS（Center for Advanced Research on Logic & Sensibility），Series Vol. 1: pp. 297–323. Keio UP.
23. “Challenges for Issues Concerning the Filming of Visual Sensibilities: The Case of Clinically-oriented Ethnographic Filming.”，単著，平成21年（2009）3月，Shigeru Watanabe（ed.）CARLS Series Vol. 2: pp. 311–329.
24. 「文化を跨る身体――間文化的アートとしてのButoh――」，慶應義塾大学アートセンター年報16号2008/9，2009年4月：6～18頁，単著，平成21年（2009）4月，『アートセンター年報』，慶應義塾大学アートセンター，第16号，6–18頁.
25. “Embodied Experience and Personhood: Towards a Cultural Study of Logic and Sensibility（Implications from Trance States）.”，単著，平成23年（2011）3月，Keio University Press, Shigeru Watanabe（ed.）CARLS Series Vol. 4: pp. 425–441.
26. “Positioning Sensorial Anthropology in Relevance to Logic and Sensibilities Research”，単著，平成24年（2012）2月，Keio University Press.

（学会口頭発表）

1. 「東南アジアの地方都市の文化人類学的研究」，共同，昭和59年（1984）5月，日本民族学会，第23回研究大会（大阪）.
2. “Ontake Shinko: An Ethnographic Approach to the Process of Transformation of Traditional Belief, Symbols, and Organization.”［31pages］，単独，昭和61年（1986）September 10.，The Japanese Studies Centre, Clayton, Australia.
3. “Rethinking the Experiential Patterns in Cross-cultural Encounters in Contemporary Japan: an Aspect of Alienation and Reinvention of New Ethnicity against the Background of the Post-Industrial Age.”［double-spaced 14 pages］，単独，平成1年（1989）July 8., Osaka University for the Symposium on *Internationalization and Cultural Conflict*.
4. “Passages Lost: Symbolic Journey of the Middle-Aged Women through Experiences of Affliction in Contemporary Japan and Types of Liminoid for Transition.”［double-spaced 18 pages］，単独，平成2年（1990）January. 19., Osaka University for the International Symposium on *Human Suffering and Civilization* organized by Arthur Kleinman.
5. “Theoretical Perspective on the Changes of the Representations of Others as Sources of Unusual

Events in Popular Culture."［double-spaced 29 pages］., 単独, Paper read at the International Conference on *Others*, in Discourse, held at Victoria University in the University of Toronto.

6. 「浮遊する本源志向と象徴表現――多文化混在多声状況におけるエスノセミオティクスの変動から――」（学会主催シンポジウムのパネリストとして，単独発表と，室井尚氏ほかと共同討論），単独発表と共同討論，平成6年（1994）5月8日，シンポジウム『象徴とコミュニケーション―記号解釈のダイナミズム』日本記号学会2004年度年次大会，慶應義塾大学・三田・北新館ホール.
7. "Posture and Aesthetic Discourse: Representation of Symbolic Power Relationship in Modern Japanese Demeanour."，共同，平成6年（1994）Oct. 14，symposium on *Foucault*, Victoria College, the University of Toronto.
8. 宮坂敬造（シンポジウム司会と討論），「人間科学と臨床の地平」，共同，平成12年（2000）1月31日，慶應義塾大学文学部人間科学フォーラム・シンポジウム，慶應義塾大学・三田・北新館ホール.
9. "Unusual Gestures in Japanese Folkloristic Ritual Trance and Performances."（国際学会発表・原稿執筆後の単独発表），単独，平成12年（2000）April 4，Paper read on April 4, 2000, at the conference on *Gestures: Meaning and Use*, at the Universidade of Fernando Pessoa, Porto, Portugal.
10. 「宙空に身を翻らす姿態：ジェンダーの磁場のゆくてに―浮動するジェンダーとジェンダー文化研究―」，単独，平成12年（2000）6月24日，形と文化会定例学会，慶應義塾大学・三田・大学院棟311.
11. "Rethinking Batesonian Approach to Humor: A Critical Reformulation with relevance to Epistemological Cognitive Paradoxes of Humor."（国際学会分科会"Epistemological Cognitive Paradoxes of Humor"分担発表・原稿執筆後の単独発表），単独，平成12年（2000）July 24，Paper read at *the 12th International Conference on the Study of Humor* at Kansai University, Suita, Osaka, in the section of Epistemological Cognitive Paradoxes of Humor.
12. Comment on the lecture by Professor Kenneth J. Gergen（Social Psychology, Swarthmore College, U.S.A.），"Invitation to Social Constructionism: Rethinking Psychology and Social Sciences in Postmodern Contexts."（指定討論者としてのコメント発表），単独，平成12年（2000）November 8，三田哲学会共催・人間科学コロキュアム11月8日（水），慶應義塾大学・三田・北新館4階会議室.
13. 「社会学理論と他者性」（シンポジウム討論者として口頭発表），単独，平成13年（2001）7月14日，三田社会学会大会，慶應義塾大学・三田・大学院棟313番教室.
14. "Transcultural Phase as Appeared in the Process of Innovative Dance Tradition and Its Practical Transmission: Anthropological Approach to Intercultural Performance."（原稿執筆後の国際人類学民族学連合学会（International Union of Anthropological and Ethnological Science）"The Human Body in Anthropological Perspectives"分科会・座長および発表），座長，単独発表と共同討論，平成14年（2002）September 23，at *Inter-Congress of IUAES*, in the section of "The Human Body in Anthropological Perspectives," September 23–26, 2002 Tokyo, Toshi-Center Hall, Tokyo（当日用の英文発表原稿抄録収録に掲載）.

15. “Work Ethics? From a View of Anthropology: A relevancy of play framing?”（double-spaced 19 pages），単独，平成15年（2003）10月2日，A paper read at the Conference on 21th Century COE International Symposium on *Origin of “Work Ethics,”* October 2, 2003, G-SEC LAB, Mita campus, Keio University.
16. 「笑いに響く多様な声を聴く―文化における笑いのありかと表象のかたち：笑いのありかとベイトソンの思想，単独，平成15年（2003）10月25日，形と文化会（21COEプログラム共催「『笑い』の原点を問う」共催），慶應義塾大学・三田・新研究棟A会議室.
17. “Hovering on the abysses between the field and the screen—the issues on visual documentation/representation, the fact/the factitious/the fictitious of clinically oriented ethnographic film and the variability in underlying contexts of filming and displaying.”（国際学会・分科会“Ethnographic Film”原稿執筆後の単独発表），単独，平成16年（2004）October 28, Delivered in the section 2 “Ethnographic Film” for the international conference on *the Social Use of Anthropology in the Contemporary World*, the National Museum of Ethnology, Suita, Osaka, October 28–29, 2004.
18. 「グレゴリー・ベイトソンの精神の生態学と芸術の心性のシンポジウムの意義（Mary C. Bateson教授〔ハーヴァード大学〕を囲むシンポジウム『グレゴリー・ベイトソンの精神の生態学と芸術の心性』企画と司会，討論），単独，平成19年（2007）6月18日，慶應義塾大学アートセンター<トランス文化の位相研究会>左記シンポジウム，慶應義塾大学・三田・東館6階 G-SEC LAB室.
19. 「アラン・ヤング教授講演”Changing Perspectives on Mind, Brain, and Empathy: Implications for Understanding the Intersection of Reason and Emotion”について」（企画・司会と総合討論：単著ディスカッション・ペーパー／配布資料，1–10頁），共同，平成1年（2007）7月29日（10:00–18:00），慶應義塾大学人文グローバルCOEシンポジウム『文化臨床医療人類学の新展開―アラン・ヤング教授講演を迎えて』，慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB室.
20. 「宗教と医療にみる狂気の文化的解釈―医療人類学，宗教学，精神医学の対話―異常をめぐる論理と感性の人類学と精神医学諸学派の展開（2）」（企画・司会と討論），共同（総括討論），平成10年2008年3月1日，慶應義塾大学人文グローバルCOEシンポジウム（左記の総合題参照），慶應義塾大学・三田・東館6階GSEC-LAB室.
21. 「文化とこころ：精神医学・人類学・歴史学の対話」（総括討論担当）「医療人類学と生命倫理：その相補的関係」（指定討論者），共同企画，単独，討論，平成20年（2008）8月3日，慶應義塾「大学人文グローバルCOEシンポジウム（左記の総合題参照），慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB室.
22. 総括討論：国際シンポジウム「医療人類学の最前線　I：遺伝，神託，バイオテクノロジー」（共同企画・総括討論担当），共同企画，単独，討論，平成21年（2009）1月10日，慶應義塾大学人文グローバルCOEシンポジウム（左記の総合題参照），慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB室.
23. 「医療人類学と生命倫理：その相補的関係」（指定討論者として，単独発表〔PPT7枚〕：応答講演カール・ベッカー教授　〔京都大学　こころの未来研究センター；倫理学〕「日本の医療は医療人類学から何を学ぶべきか―臓器移植とiPS治療を中心に」に対して，マーガレット・ロック教授〔カナダ　マギル大学；　医療人類学〕の基調講演「生命医学テクノロジーの発達に伴う自己と社

会の変容の姿―医療人類学の視点より―」に関与させて討論），単独，平成21年（2009）1月11日，第2回京都大学・慶應義塾大学COE合同シンポジウム：『心・病・文化―医療をめぐる文化と倫理』京都大学時計台記念館2階国際交流ホールⅠ.

24. 総括討論：国際シンポジウム「医療人類学の最前線　II：　国家，感染，バイオポリティック」（共同企画・総括討論担当），共同（企画責任者）と単独発表，平成21年（2009）1月23日，慶應義塾大学人文グローバルCOEシンポジウム・慶應義塾大学・三田・東館8階大会議室.

25. 「文化と医療の経験の場の構造の時代転回――学際的相互関与性が発生する場」（企画・問題提起単独発表〔PPT8枚〕）『公開シンポジウム〈文化と医療〉再考―人類学と文化精神医学の相互関与性の現在』“Rethinking Anthropological and Transcultural Psychiatric Studies on Culture and Medicine: the Challenges of Interdisciplinarity, with Reference to Implications for Advanced Research on Logic and Sensibilities”，単独，平成21年（2009）2月25日，日本文化人類学会・関東地区研究懇談会と慶應義塾大学人文グローバルCOE共催・左記題名のシンポジウム，慶應義塾大学・三田・東館4階G-SECセミナー室（第Ⅰ部），同東館6階GSEC-LAB室（第Ⅱ部）.

26. “The filming of visual sensibilities and filming process of the human mind.”（単独発表と“The Visual and Academic Turn in Contemporary Japanese Academia.”分科会座長：分科会）The 1st International Conference on Visual Methods, Day 3, Session 7: 9.25 ～ 9.50, Clothworkers Centenary Concert Hall, University of Leeds, England，単独，問題提起，発表と討論，平成21年（2009）September 17，Paper read at *The 1st International Conference on Visual Methods*, Day 3, Session 7: 9.25–9.50, Clothworkers Centenary Concert Hall, University of Leeds, England.

27. 「映像実践を通じたこころの学際的研究―文化と医療誌における映像をおもな対象として―」（京都大学こころの未来連携研究代表として単独発表／備考：平成22年2月20–21日，京都大学芝蘭会館こころの未来センター会場で同上題でポスター発表も行う），共同（企画責任者），平成21年（2009）12月5日，京都大学こころの未来研究センター主催・研究報告会，同大学稲森記念館中会議室.

28. 「映像人類学とアート―映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係：“Art & Visual Anthropology—Frontiers of Anthropological Expression: Towards a New Relationship between Observation and Expression Using Visual Images and Other Art Forms”（全体企画と，グレゴリー・ベイトソンによる映画の解説，シンポジウム問題提起と討論），共同（企画責任者），平成21年（2009）12月14–15日，慶應義塾大学アートセンターと同大学人文グローバルCOE共催，京都大学第13回国際研究会協賛シンポジウム。慶應義塾大学・東館6F G-SEC LAB室および東館8F ホール.

29. “Significance of anthropological approach to Emotion: ranging from sorrow to collective trauma (opening speech).”「“*Anthropological Approaches to Emotion*”感情の人類学―映像からのアプローチ」（企画・司会・討論），単独，平成21年（2009）12月16日，慶應義塾大学人文グローバルCOE研究セミナー〈感情の人類学―映像からのアプローチ〉・慶應義塾大学・三田・東館セミナー室.

30. 「ディアスポラと生活感情：文化人類学的アプローチ」（この発表は，要旨と討論を英語，本文を日本語で発表しました：発表時間40分），単独，平成22年（2010）7月20日，Emotional Terrain of Transnational Immigrants―トランスナショナルな移民の生活感情：慶應義塾大学・三田・東

館4Fセミナー室.

31. 「底つき感と文化―“Cultural Perspective of “Hit-Bottom feeling”: An Anthropological Approach”」(研究セミナー『「負の感情」とはなにか？「怒り」「悲哀」「底つき感」の通文化比較とその手法としての映像』における問題提起と個別発表〔要旨と討論を英語，本文を日本語で発表〕)，単独，平成22年（2010）8月15－16日，慶應義塾大学人文グローバルCOE論理と感性の先端的教育研究拠点哲学文化人類学班・京都大学こころの未来研究センター連携研究プロジェク共催左記の研究セミナー，京都大学稲盛記念館中会議室.
32. “Towards a versioned-up ecology of mind.”（研究セミナー「存在・論理的な種：動物たちとともに考えるために“*Onto-logical Species: Thinking with Animals*”で問題提起発表)，単独，平成22年（2010）8月30日，慶應義塾大学人文グローバルCOE左記セミナー，慶應義塾大学・三田・東館6F・G-SEC LAB室.
33. 「ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究―文化と医療誌における映像資料・精神生態関与資料をおもな対象として―」，共同企画と単独発表，平成22年（2010）12月5日，京都大学こころの未来研究センター主催・研究報告会，京都大学稲森記念館中会議室.
34. “Occasions/elements of occasions”（指定討論者としてのコメント発表：Professor Annemarie Mol〔University of Amsterdam〕講演“On Eating Well Health, taste and other‘goods’of food in daily care practices”への討論)，単独，平成22年（2010）12月11日，慶應義塾大学人文グローバルCOE左記研究セミナー，慶大・三田・南館4F.
35. “Commentary points as to“Understanding Religion through Brain Science”（PPT7枚，約40分英語で発表)，単独，平成23年（2011）February 18，慶應義塾大学人文グローバルCOE研究セミナー“*Critical Issues Research Seminar on Understanding Religion through Brain Science: Prospects and Critical Issues*”慶大医学部予防医学校舎 セミナールーム7.
36. 「異文化を写す映像の共有・出会い状況のエスノセミオティクス――映像人類学の原風景における〈共有〉と〈交錯〉」，単独，平成23年（2011）2月20日，国立民族学博物館『映像の共有人類学』プロジェクト研究会，10:00～19:00（東京大学駒場校舎).
37. “From Sensory Experience to Cultural Ritual: The Sensory Turn in Anthropology.”（研究セミナー『多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平』の企画と問題提起)，共同，平成23年（2011）July 30，慶應義塾大学人文グローバルCOE左記研究セミナー，慶應義塾大学・三田・東館6F・G-SEC LAB室.
38. “Personhood, Rationality and the Senses: Cultural Anthropological Approaches to Overcoming the Dichotomy of Logic and Sensibilities.”，単独，平成23年（2011）September 13，Global COE Symposium“*Toward an Integration of Logic and Sensibility—from Neuroscience to Philosophy—*”Keio University, Mita campus. North Hall.
39. 「グレゴリー・ベイトソンとマーガレット・ミードの映像記録の問題」館外研究員として。90分発表，単独，平成24年（2012）1月28日，大阪府吹田市・国立民族学博物館の〈映像の共有人類学〉プロジェクトの研究会　同博物館の第3演習室.
40. 宮坂敬造・石井美保・大石高典，山口亮太（共同ポスター発表）「ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究―文化と医療誌における映像資料・精神生態関与資料をおもな対象

として―」，単独，平成24年（2012）2月25日，京都大学こころの未来，京都大学稲盛財団記念館3階小会議室Ｉ。ポスター発表.

41. 「文化と医療研究からみた現代人類学における『比較』の方法と実践」（フロア質疑への応答および総合討論〔日本文化人類学会・関東地区研究懇談会幹事として企画実行〕），共同討議，平成24年（2012）8月29日，日本文化人類学会・関東地区研究懇談会と「科学技術の民族誌研究グループ」共催，慶應義塾大学・三田・東館G-SEC LAB室.
42. “Transcultural Perspective on Diversities of Imagination and Practices concerning Cross-cultural and Cross-species Communication”（シンポジウム“*Cross-cultural and Cross-species Communication,*”での単独発表），単独，平成24年（2012）September 15，International Institute for Advanced Studies（京都府の国際高等研究所の第2階研究会），9月14–15日開催の左記のシンポジウム.
43. “Between different orders of classification: a cultural anthropological exploration”，単独，平成24年（2012）Oct. 20，Paper to be read at the conference on Franco-Japanese Workshop on “Logic, Language, and Computation in a Multi-cultural Perspective,” Keio University, Mita Campus, G-SEC LAB.
44. 司会・総合討論：宮坂敬造「虐殺とトラウマ研究の最前線_ラトガース大学文化人類学者A. ヒントン先生をお迎えして」，共同，平成24年（2012）10月25日，日本文化人類学会，関東地区研究懇談会（同会幹事として企画実行，慶應義塾慶大学・三田・東館8階大会議室.
45. 「ベイトソン，ミードの映像による文化研究の今日的意義―〈映像の共有〉の多元的複層的諸相の分析から」（分科会「映像の共有人類学」における個別発表と共同討論），単独，平成25年（2013）6月9日：14:30–17:25，日本文化人類学会第47回研究大会（6月7–8日）慶應義塾大学・三田・西校舎D会場527教室.
46. “Where is your shooting position: trance, cine-trance, and the aspect of shared anthropology.”“（映像人類学ワークショップ〔9:00–17:00〕の5人のなかの単独発表），単独，平成25年（2013）11月21日：9:30–10:15，Workshop on Asia Pacific International Ethnographic Documentary Festival, University of Melbourne, Sidney Myer Asia Centre, 2F.
47. “the context of inherent relationship between performance ethnography and ethnographic film: a reflection on the features of Japanese ethnographic films”，単独，平成25年（2013）11月23日：10:30–12:00，同上，地下1Fホール.
48. “Position of Shooting in Visual Folklore and Anthropology in 1930s, 1950s, and 2000s: Through a critical reexamination of Gregory Bateson’s works and a special attention to the issue on medical anthropological /visual ethnography.”，単独，平成26年（2014）1月25日，Research seminar on psychological anthropology and the issue on logic and sensibility，慶應義塾大学・三田・東館4Fセミナー室.

（講演）

1. 「文化と精神病理―心理医療人類学のアプローチから」，単独，昭和63年（1988）5月26日，安田生命社会事業団セミナー室（現・明治安田こころの健康財団）.

2. “Karen Nakamura’s visual anthropological movie on Bethel House in Northern Japan, and the significance of ‘tojisha’ movements to improve the quality of life of the mentally disabled.”（於いて：オーストラリア，メルボルン大学・地球人口健康研究所・地球精神保健部門），単独，平成25年（2013）11月25日17:30–19:00，207 Bouverie Street, Basement Lecture Theatre 1, University of Melbourne.
3. “A is not A: Ritual and Double Bind in Communication?Remark on Bateson and Wittgenstein” A special mini-lecture for Wittgenstein meetiing. Organized by the Research Center for Thinking and Behavioral Judgment, Keio University，単独，平成26年（2014）1月19日，慶應義塾大学・三田・東館G-SEC LAB室.

（その他，編者として編んだ特集記事）

1. 「特集〈今，多々，異文化を語る〉」（特集企画責任編集および巻頭辞），特集編著，平成15年（2003）1月，『三色旗』，慶應通信，第658号，2–64頁.
2. “Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses”（No. 3 February 21, 2013）Guest Editor: Keizo MIYASAKA，ゲスト編者，平成25年（2013）February, Ars Vivendi Journal, Ritumei-kan University On-line Juornal, 2, Special Issue., http://www.ritsumei-arsvi.org/en/publication

（辞典項目執筆）

1. 『日本大百科全書』秋庭隆編，分担執筆，昭和63年（1988）3月，小学館（現在ディジタル化済）.
2. 『二十世紀思想事典（第一版）』木田　元・栗原　彬・丸山圭三郎・野家啓一編，分担執筆，平成1年（1989）4月，三省堂.
3. 『二十世紀思想事典（第二版）』木田　元，栗原　彬，丸山圭三郎，野家啓一編，分担執筆，平成9年（1997）10月，三省堂.
4. 『情報学辞典』，西垣　通・北川　高嗣・須藤　修・浜田純一・吉見俊哉・米本昌平編，分担執筆，平成14年（2002）6月刊，弘文堂.
5. 『文化人類学文献事典』小松和彦・田中雅一・谷　泰・原　毅彦・渡辺公三編，分担執筆，平成16年（2004）12月刊，弘文堂.

（翻訳）

1. キャサリン・ジョージ，「エスノセントリズムの問題―西欧文明による未開アフリカ観とその歴史」（梶原影昭と共訳），共訳，昭和50年（1975）11月，『展望』筑摩書房，11月号，No. 203, 395–105頁，1975年.
2. チャールズ・O・フレイク「文化の構造的記述―スバヌンの宗教行動」，単独訳，昭和51年（1976）3月，『現代思想』青土社，Vol. 4-3，92–110頁，1976年.
3. L・R・ハイアット「夜の女王，母権，男子結社の秘儀―魔笛の人類学的解釈」，単独訳，昭和55年（1980）11月，『現代思想』青土社，Vol. 8-13, 168–185頁，1980年
4. エドムント・R・リーチ『文化とコミュニケーション』，共訳，昭和56年（1981）6月，紀伊国屋書店，1981年.

5. ヘレン・B・シュワルツマン「〈子ども〉は創られた―歴史と文化によって創られた子ども期の人類学的考察―」，山口昌男・中村雄二郎編，『挑発する子どもたち』，所収，単独訳，昭和59年（1984）1月，駸々堂出版（全220頁），122–164頁，［うち訳者解説文，p. 164］，1984年.
6. ジェイムズ・L・ブーン「レヴィ＝ストロース」（翻訳単行本中の第9章分担訳），加藤尚武・中村雄二郎他・分担訳，『グランドセオリーの復権―現代の人間科学』，所収，単独訳，昭和63年（1988）3月，産業図書（全379頁），275–313頁［うち訳者解説文，pp. 276–7］，1988年.
7. ローレンス・ラム著（宮坂敬造・訳），「安寧の避難地をもとめて―香港中国人のトロントへ移住と定着―」，ロナルド・スケルドン編（可児弘明・森川真規雄・吉原和男監訳）『香港を離れて―香港中国人移民の世界』，所収，単独訳，平成9年（1997）6月，行路社（全576頁），該当訳頁239–280頁，1997年.
8. 「ユートピアとしての記号学理論」“SEMIOTIC THEORIES AS UTOPIAS” Paul Bouissac（University of Toronto）〔書き下ろし論文の翻訳〕，単独訳，平成14年（2002）7月，坂上貴之・宮坂敬造・巽孝之・坂本光『ユートピアの期限』慶應義塾大学出版会（全403頁）所収，119–152頁.
9. 翻訳「故郷から遠ざかった故郷―国外居住者にみる『ディアスポラ』状況」A・モイスミューラー著（共訳）〔書き下ろし論文の翻訳〕，共訳，平成15年（2003）1月，『三色旗』慶應義塾大学出版会，1月号，宮坂敬造責任編集〈特集・今，多々，異文化を語る〉（同号2–64頁）No. 658, 4–14頁.
10. アラン・ヤング著，宮坂敬造（単独訳・解題），「トラウマを呼びこむ時代と虐殺の風景―戦争加害者の負う心的外傷と“時代一過性の精神の病い”」原著（Allan Young, “The Self-traumatized Perpetrator as a “transient mental illness.”，単独訳，平成18年（2006）4月，柴田陽弘著『風景の研究』，慶應義塾大学出版会，241–236頁.

（発言等が記載・印刷された執筆物）

1. 討論（会場質問者）:「シンポジウム・病いのシンボリズム」，単独，昭和62年（1987）12月，『民族学研究』Vol. 48, No. 3, pp. 374–375.
2. シンポジウム発表要旨:「地方都市研究の意義」，単独，昭和62年（1987）5月，『三田評論』〈シンポジウム・都市〉881号，32–37頁.
3. コメント:「癒しの文化―現代日本の民間医療」，単独，昭和62年（1987）12月，国際シンポジウム『医療人類学の可能性』，国立がんセンター（12月12日）抄録掲載の『ライフサイエンス』，Vol. 15, No. 3, 28頁.
4. 質疑:「未開社会異文化理解」，単独，昭和63年（1988）3月，『現代世界と人類学』（クロード・レヴィ＝ストロース講演と討議），川田順造監修，サイマル出版会（全266頁），41–42頁，1987年.
5. ディスカッション：ヨーロッパの未開概念（ディスカッション），単独，平成1年（1989）9月，川田順造編，『「未開」概念の再検討I』，リブロポート，154–5頁および174頁.
6. 「対テロ戦争で現れたPTSD」（アラン・ヤング教授講演“PTSD in the War on Terror”解題・逐次翻訳〔共訳〕・討議および論文単独訳），単著，平成20年（2008）3月，「PTSD と「記憶」の歴史――アラン・ヤング教授を迎えて』，立命館大学生存学研究センター，13–15頁，17–44頁.

（その他の報告記事とエッセイ等）

1. 「フィリピン小都市に探る現代文化の問題―パナイ島の女性呪医（1）（2），異文化認識と小都市の様相，小都市文化の様相，小都市と象徴的交換」〔エッセイ〕，単著，昭和59年（1984），『ライフサイエンス』，Vol. 11, No. 5, 78–81頁；同，No. 6, 66–70頁；同，No. 7, 72–76頁；同，No. 8, 70–73頁；同，No. 9, 73–77頁，1984年.
2. 「ハイテク時代，その蜃気楼の近未来へ」〔エッセイ〕，単著，昭和60年（1985），『ライフサイエンス』，vol. 12, No. 5, 40–43頁，1985年.
3. 講演会報告：「ノーマン・C・グリンバーグ博士講演会「アメリカ・インディアンの過去と現在」慶應義塾大学地域研究センター主催。〔報告記事〕，報告記事，単著，平成1年（1989），CASニューズレター（慶應義塾大学地域センター発行），No. 26，p. 2（115）.
4. 「心の深層をひらく文化の風景―新時代のアメニティを求めて：人類学的考察」〔エッセイ〕，単著，平成2年（1990），『ビーアメニティ』，創刊号，5–8頁，1990年.
5. 「民族・文化と企業―多様文化と民族主義との間で考える」〔解説記事〕，解説記事，単著，平成5年（1993）2月，The Japan-Canada Journal，1993年2月1日号，pp. 3–6，1993年.
6. 「建国のスタートを反映」.〔解説記事〕，単著，平成5年（1993）11月，The Japan-Canada Journal，1993年11月1日号，pp. 4–5，1993年.
7. 「《反・転／（移）異化》して現れる身体空間―運動と形と美の関係―ウィリアム・フォーサイスの世界にふれて」，単著，平成7年（1995），ARTLET・04，慶應義塾大学アートセンター，2–3頁，1995年.
8. 「西ジャワの民族音楽を聴く＆語る」（1997年7月11日，慶應義塾大学北新館ホールで実施の催事の企画報告文），単著，平成10年（1998）4月，アートセンター年報，慶應義塾大学アートセンター，5，16–17頁.
9. 「都市生活の表情と変貌」（港区ふれあい文化健康財団と慶応義塾大学アートセンターとの共催でおこなった連続講演会の1997年12月13日実施分〔港区台場区民センター〕の企画報告文），単著，平成10年（1998）4月，アートセンター年報，慶應義塾大学アートセンター，5，27–28頁.
10. 「済州島の民俗芸能を見る・語る―韓国のクッ儀礼にみられる芸能表現の現在」（1998年，10月19日，慶應義塾大学北新館ホールで実施の催事の企画報告文），単著，平成11年（1999）4月，アートセンター年報，慶應義塾大学アートセンター，6，22–24頁.
11. 「蔵族（チベット族）民族芸能の夕べ―中国雲南省の秘境・奔子欄に芸能の源を辿る」（1999年10月21日，慶應義塾大学西校舎518番ホールで実施の催事の企画報告文），単著，平成12年（2000）4月，アートセンター年報，慶應義塾大学アートセンター，7，28–31頁.
12. 対談記録：L. J. Kirmayer/宮坂敬造対談「今あらためて〝異文化間コミュニケーション〟〝異文化理解〟を語る―人類学，文化精神医学の臨床的アプローチから」，単著，平成12年（2003）9月，『三色旗』，慶大通信教育，No. 668, 22–39頁.
13. 「文化を超える位相と多文化間臨床過程にやどる根本問題―人類学者にならうシャーマンと多文化間臨床―」，単著，平成14年（2004）2月，『こころと文化』（多文化間精神医学会学会誌），巻頭言，Vol. 13, No. 1, 6–7頁.
14. 「オペラと高周波，その密やかな関係――動物として文化をつむぐ人類？」，単著，平成17年

（2005）春季号，カナダ日系社会流通雑誌『オーロラ』，4603字.

15. 「『踊る筆・描く音・奏でるからだ』ウィーンのアート・アンサンブルTAMAMUが表現する〈描〉〈楽〉〈踊〉〈語〉の共振と現代芸術上の位置」，単著，平成17年（2005）9月，『アートレット』慶應義塾大学アートセンター，24号，4頁.
16. 企画・解説プログラム作成「ダンス・絵画・音楽を融合する現代芸術の現在を考える――『踊る筆・描く音・奏でるからだ』ウィーンのアート・アンサンブルTAMAMUが表現する〈描〉〈楽〉〈踊〉〈語〉の共振と現代芸術上の位置」，単著，配付資料，平成17年（2005）10月，慶應義塾大学・三田・北館ホールで実施で，2005年10月7日実施の企画公演当日プログラム解説配布（単著解説4頁）.
17. 「ダンス・絵画・音楽を融合する現代芸術の現在を考える――『踊る筆・描く音・奏でるからだ』ウィーンのアート・アンサンブルTAMAMUが表現する〈描〉〈楽〉〈踊〉〈語〉の共振と現代芸術上の位置」，報告記事，平成18年（2006）4月，『アートセンター年報』，慶應義塾大学アートセンター，No. 13，28–29頁.
18. 鼎談記録／ファビアンヌ・デルピ＝アドラー，前田富士男，宮坂敬造「一九六〇年代日本の〈映像〉芸術と倫理」，共同討議の記録，平成18年（2006）10月31日，慶應義塾大学二一世COE人文科学拠点〈心の統合的研究センター〉Newsletter, No. 15, 2–6頁.
19. 「Winter Music Concert　アメリカの歌唱文化を語り，歌う――ソプラノ歌手．ピアニストが表現するブロードウェイ．ミュージカル，ラグタイム，ジャズ，クリスマスソングの文化的色彩」（2006年12月11日企画開催の大学学生むけ催事の報告記事），報告記事，平成19年（2007）10月，慶應義塾大学生活懇談会記録（26），9–11頁.
20. 「べてるの家で：ディスアビリティと映像人類学―イェール大学 Karen Nakamura 氏を迎えて―“CRAZY IN JAPAN: SCHIZOPHRENIA, TRAUMAS OF MEMORY AND COMMUNITY STORYTELLING IN RURAL JAPAN”」（2008年1月23日開催の研究会の報告），報告記事，平成20年（2008）3月28日，慶應義塾大学　論理と感性の先端的教育研究拠点　Center for Advanced Research on Logic and Sensibility Newsletter No. 3, 7頁.
21. 「合同シンポジウム―心・病・文化―医療をめぐる文化と倫理」（2009年1月11日開催の左記シンポジウムの報告），報告記事，平成21年（2009）3月31日，慶應義塾大学　論理と感性の先端的教育研究拠点，Newsletter 2009. March. No. 7, 6頁.
22. 「映像人類学とアート」人類学的表現の新地平を求めて―映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係」（2009年12月14–15日企画開催のシンポジウムの報告と討論），単著報告と討論，平成22年（2010）4月，『アートセンター年報』慶應義塾大学アートセンター，No. 17, 35–37頁.

（書評）

1. アーヴィン・ゴッフマン『枠組み分析』」，単著，昭和59年（1984）3月，青木保編，『象徴人類学』，至文堂，272–277頁.
2. J・ピーコック著，今福龍太訳，『人類学と人類学者』，岩波書店，1988年），単著，昭和59年（1988）9月，『民族学研究』Vol. 53, No. 2, 246–248頁.

大学で企画した教育講演会，研究講演会とセミナー一覧（一部割愛）

（1）研究会主催企画・補助等（1997年以前は省略）

1. 三田哲学共催・人間科学コロキュアム「“Space as Memory and Emotion”―社会記号学による空間概念の展開―記憶と感情としての場の空間」講師・Paul Bouissac トロント大学教授，企画・司会・逐次通訳，平成9年（1997年）5月15日，慶應義塾大学・三田・旧図書館2階小会議室.
2. Richard Shweder　シカゴ大学教授講演会　“Cultural psychology and anthropology.”司会，平成10年（1998年）2月2日，慶應義塾大学・三田・新研究棟A会議室.
3. 慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相研究会」企画：“Living images: the power of metaphor in healing.”講師・Laurence. J. Kirmayer（文化精神医学者，マックギル大学教授・社会文化精神医学部門所長），企画・司会・逐次通訳，平成10年（1998年）2月26日，慶應義塾大学・三田・新研究棟B会議室.
4. 日本顔学会特別セミナー講演会　「顔をつくる―記号論をめぐって」，講師Paul Bouissac（トロント大学記号学教授），逐次通訳と解説，平成10年（1998年）6月2日，東京・ポーラ文化研究所.
5. 上演舞踊研究会講演：“Everyday Movements as Dance: Cultural Semiotics of the Choreography of Daily Tasks and Encounters in Cross-cultural Perspective,”講師・Paul Bouissac（トロント大学記号学教授），逐次通訳，平成10年（1998年）6月4日，お茶の水女子大学大学院人間文化研究科舞踊表現行動学科研究室.
6. 慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相研究会」企画：「オペラから電子音楽へ」，講演・Pamela Z（電子音楽作曲・演奏家，ブルブライト・アーティスト・イン・レジデンス），企画・司会と逐次通訳，平成11年（1999年）6月17日，慶應義塾大学・三田・三田メディア・センター図書館AVホール.
7. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：「現代医学とジェンダー―性同一性障害をめぐって」，講師・山内俊雄（埼玉医科大学教授倫理委員会委員長・精神医学），企画・司会，平成11年（1999年）10月20日，慶應義塾大学・三田・新研究棟文学部会議室.
8. 人間科学コロキュアム談話会企画：「形成医学と性同一性障害」，話題提供・原科孝雄（埼玉医科大学総合医療センター形成外科教授），企画・司会，平成11年（1999年）10月27日，慶應義塾大学・三田・新研究棟集計室.
9. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：「台湾における文化精神医学の展開」，講師・林憲（台湾大学名誉教授），企画・司会，平成12年（2000年）1月13日，慶應義塾大学・三田・三田メディア・センター図書館地下1階・AVホール.
10. 慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相研究会」企画：「異文化に舞踏は伝わるか」講師・田中泯（舞踏家，舞踊資源研究所主宰），司会，平成12年（2000年）9月26日，慶應義塾大学・三田・北新館会議室.
11. 慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相研究会」企画：「オーストラリア先住民の現代芸術表現活動の基層―世界観，ドリームタイム」，講師・Wesley Enoch，司会，平成13年（2001年）11月1日，慶應義塾大学・三田・東館8階会議室東館8F会議室.
12. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：「沖縄からの移住者と本土滞在経験―移民経験の人類学的調査と文学的表象の分析」，講師・Steve Rabson（ブラウン大学東アジア研究学科准教

授），司会・逐次通訳，平成14年（2002年）6月26日，慶應義塾大学・三田・国際センター（萬來舎）1F・イサム・ノグチ記念室.

13. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：「多文化社会カナダの芸術家の表現活動」， 講師・Jocelyne Montpetit（カナダ国立演劇学校教授・上演芸術），司会・逐次通訳，平成14年（2002年）12月12日，慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB.
14. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：“Social Issues in Reproductive Health among the Maya of Guatemala.”講師・Elaine Bearer（ブラウン大学准教授細胞医学研究，臨床医），司会・逐次通訳，平成15年（2003年）6月23日，慶應義塾大学・三田・大学院棟346教室.
15. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：「ニューヨークにおける若いドミニカ系集団のアイデンティティ構築：アフタースクールプログラムのダンス学習者を事例に」 講師・三吉美加（武蔵大学講師，文化人類学），討論，平成15年（2003年）7月9日，慶應義塾大学・三田・商学部会議室.
16. 人間科学コロキュアム企画：「生きる意志」を診断する：自殺とうつ病の医療人類学」。講師・北中淳子（東海大学非常勤講師），指定討論，平成15年（2003年）7月14日，慶應義塾大学・三田・大学院棟346教室.
17. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：「フランスの失業者対策への人類学的アプローチ」講師・中川理（日本学術振興会特別研究員，天理大学非常勤講師），司会，平成15年（2003年）7月18日，慶應義塾大学・三田・商学部会議室.
18. 慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相研究会」共催・ORC整備事業　デジタルアーカイヴ・リサーチセンター「慶應義塾大学図書館所蔵20世紀映像及び音像資料のデジタル情報化」プロジェクト関連『トランスと身体表現研究会』企画／“Consciousness and Music” 講師・Joseph Goguen（カリフォルニア大学サンディエゴ校教授・数学・コンピューターサイエンス），即興歌唱Ryoko Goguen，司会・逐次通訳と討論，平成15年（2003年）12月19日，慶應義塾大学・三田・アート・センター資料室.
19. 慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相研究会」共催・ORC整備事業　デジタルアーカイヴ・リサーチセンター「慶應義塾大学図書館所蔵20世紀映像及び音像資料のデジタル情報化」プロジェクト関連『トランスと身体表現研究会』第2回目企画／「立体映像によるパフォーマンス記録の試み」講師・柴田隆史（早稲田大学国際情報通信研究センター助手），司会と討論，平成15年（2003年）2月20日，慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB.
20. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画：“Cities, Media, and the Global: Perspectives and Research Experiences.”講師・Ulf Hannerz（ストックホルム大学教授・都市社会人類学），司会・宮坂敬造，2月26日（木），旧図書館2階小会議室。，平成16年（2004年）2月26日，慶應義塾大学・三田・旧図書館2階小会議室.
21. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画第3回目研究会企画／「臨床的クロノトポス：即興性，野性性，身体と言葉」講師・下地明友（熊本大学大学院助教授／医学薬学研究部臨床行動科学分野・文化精神医学），および，「アウラ・ヒステリカからの舞踏作品」，講師・小林嵯峨（舞踏家），司会と討論，平成16年（2004年）2月27日，慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB.
22. 慶應義塾大学文学研究科21COE　表象B　研究講演会“Masters of Their Conditions. At the

Crossroads of Health, Culture and Performance.”講師・Jacque A. Arpin M.D.（スイス・ジュネーヴ在住・私立治療相談機関Transcultural Consulting主宰，専攻：文化精神医学・文化人類学・パフォーマンス研究），司会・前田富士男文学部教授アートセンター所長，訳・討論，平成16年（2004年）7月24日，慶應義塾大学・三田・西校舎522教室.

23. 慶應義塾大学文学研究科21COE　表象B　研究講演会，「大人を泣かせる詠唱―文化の比較研究からみた歌唱と人間の感情―」William O. Beeman ブラウン大学教授（人類学，中近東地域研究，オペラ・パフォーマンスの人類学的研究）司会，平成16年（2004年）11月1日，慶應義塾大学・三田・新研究棟1階A・B会議室.
24. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画“Expatriates in Diaspora,” 講師・Alois Moosrmuellerミュンヘン大学異文化間コミュニケーション所所長，司会，平成16年（2004年）6月9日，慶應義塾大学・三田・東館6階G-SEC LAB.
25. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画・司会討論，「私がおこなっている実践人類学――科学技術関係応用人類学の最近の一動向と事例―講師：クリストファー・キーナ（鴨・最先端技術の水先案内代表・カルフォルニア大学Berkeley人類学博士），司会，平成18年（2006年）8月3日，慶應義塾大学・三田・東館8階・小会議室.
26. 人間科学コロキュアム「多文化をまたがる現代演劇表現の可能性―マレーシア・インスタント・カフェ劇団の試みから」（講演会企画と司会担当），講師：ジョー・クカサス（マレーシア：劇団演出家），平成19年（2007年）4月26日，慶應義塾大学・三田・旧図書館小会議室.
27. 「グレゴリー・ベイトソンの精神の生態学と芸術の心性――M. C. Bateson 教授（ジョージ・メイソン大学名誉教授）を囲んで」の慶應義塾大学「トランス文化の位相」研究会・第2部として，桜井真樹子パフォーマンス・アーティストの仏教曼荼羅舞踊の実演を企画開催，平成19年（2007年）6月18日，慶應義塾大学・三田・東館G-SEC LAB.
28. “Two Japonisms”講師BruceBaird訪問研究員（マサチューセッツ大学アムハースト助教授），討論・高宮利行慶大教授による慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相」研究会を企画・実行・司会，平成19年（2007年）7月13日，慶應義塾大学・三田・旧図書館2階小会議室.
29. 「イタリアのタラントーラの踊りと憑依――その文化的背景と変化」講師・Allan Young マッギル大学教授（慶應義塾大学社会学研究科特別招聘教授）映像紹介・kataja Centonze早稲田大学客員研究員。慶應義塾大学アート・センター「トランス文化の位相」研究会を企画・司会と討論，平成19年（2007年）7月30日，慶應義塾大学・三田・第一校舎108教室.
30. 慶應義塾大学グローバルCOEプログラム，哲学・文化人類学プロジェクト，2007年度第6回研究セミナー，慶應義塾大学相互的感情身体知の文化医療人類学・人間科学研究会 「アフリカ（旧ザイール）における憑依儀礼とアフリカ的<person>―感情と象徴思考の動態」（講師Ellen Corin博士〔マッギル大学人類学科・ダグラスホスピタル併任〕企画と司会・討論担当，平成19年（2007）2月29日，慶應義塾大学・三田・大学院棟342教室.
31. 人間科学コロキアム「〈民族学的動物生態学〉と新しい〈精神の生態学〉Ethno-ethology and a new step to “Ecology of Mind”: The Issues on Frontier of Contemporary Human Sciences inspired by the Legacy of Gregory Bateson」，講師：Dominique Lester（Associate Prof., the Ecole Normale Superieure de Paris & the Museum National d’Histoire Naturelle），司会・訳・

討論，平成19年（2007年）6月3日，慶應義塾大学・三田・大学院棟354教室.

32. 人間科学コロキアム「日本における文化精神医学 ―北米との比較を踏まえて」（人間科学コロキュアム企画担当），講師：吉田尚史（東邦大学医学部精神神経医学講座・助教），司会，平成19年（2007年）8月3日，慶應義塾大学・三田・南館3階会議室.
33. 人間科学コロキアム「日系ペルー人の医療観と求療行動」，講師：マリサ・ツチダ（日秘ポリクリニック内科医師，早稲田大学研究員），司会・討論，平成19年（2007年）12月18日，慶應義塾大学・三田・南館4階会議室.
34. 慶應義塾大学・論理と感性のグローバル研究センター研究会「心理学的人類学セミナー―ラトガース大学虐殺・紛争解決・人権研究センター所長A.ヒントン先生を囲んで」，企画・司会，平成26年1月25日，慶應義塾大学・三田・東館4Fセミナー室.

（2）教育的企画・講演・公演等

1. 八王子大学セミナーハウス第164回『ベイトソン再発見』セミナー講師，平成6年（1994年）10月21～23日，八王子大学セミナーハウス.
2. 文学部共通講義『コミュニケーション―疎通と不通』招聘講師コーディネート：“Multimedia Semiotics,”講師・Professor Paul Bouissac（University of Tornoto），逐次通訳，平成9年（1997年）5月15日，慶應義塾大学・三田・南校舎444教室.
3. 文学部共通講義『コミュニケーション―疎通と不通』招聘講師コーディネート：「ボルネオ島のプナンにおける音コミュニケーションの諸相」講師・卜田隆嗣（島根大学助教授）司会，平成9年（1997年）7月10日，慶應義塾大学・三田・南校舎444教室.
4. 慶應義塾大学アートセンター研究公演「西ジャワの民族音楽を聴く＆語る」企画・司会，平成9年（1997年）7月11日，慶應義塾大学・三田・北新館ホール.
5. 慶應義塾大学アートセンター研究公演企画・司会，「都市生活の表情と変貌」，港区ふれあい文化財団との共催による港区民むけの講演会，平成9年（1997年）12月13日，港区台場区民センター.
6. 学部生むけ企画（三田哲学会講演会／人間科学コロキアム）「ドキュメンタリー映像制作の方法―現代の人間の生活・文化をどう記録するか」講師・野呂進（オフィスN・プロデューサー，元日本テレビ・プロデューサー，元映像記録メンバー），企画・司会，平成9年（1997年）12月1日，慶應義塾大学・三田・三田メディアセンターAVホール.
7. 学部生むけ企画（三田哲学会講演会／人間科学コロキアム）：「フィールの諸形態―精神病院の現場を中心として」講師・福島正人（国際大学グローバル・コミュニケーション研究所），司会，平成10年（1998年）1月21日，慶應義塾大学・三田・三田メディアセンターAVホール.
8. 学部生むけ企画（三田哲学会講演会／人間科学コロキアム）：「多文化環境下の経営」講師・アロイス・モースミューラー（慶應義塾大学ドイツ文学専攻招聘訪問講師），企画・司会，平成10年（1998年）2月7日，慶應義塾大学・三田・大学院棟335B教室.
9. 文学部共通講義『模倣と独創』招聘講師コーディネート：「ディジタル・イメージによる模造と現実」講師・日向英実（塾員，NHK・エギュゼクティヴ・ディレクター），司会，平成10年（1998年）5月28日，慶應義塾大学・三田・三田メディアセンターAVホール.
10. 文学部共通講義『模倣と独創』招聘講師コーディネート：“Meme and Serendipity: Cultural Approaches to Imitation and Creativity,”講師・Professor Paul Bouissac（University of Tornoto），

逐次通訳，平成10年（1998年）12月10日，慶應義塾大学・三田・444教室.

11. 慶應義塾大学アートセンター研究公演企画，「済州島の民俗芸能を見る・語る――韓国のクッ儀礼にみられる芸能表現の現在」，司会，平成10年（1998年）10月19日，慶應義塾大学・三田・北新館ホール.
12. 文学部共通講義『模倣と独創』招聘講師コーディネート：「家電製品とその意味づけの時代変化にみる模倣と独創―文化社会学的分析」講師・吉見俊哉（東京大学社会情報研究所助教授），司会，平成10年（1998年）12月10日，慶應義塾大学・三田・444教室.
13. 学部生むけ企画（三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム）「Twenty Important Artists：20世紀の実験音楽から―文化ジャンルと芸術家の交錯」，パフォーマンスと講演者・Pamela Z（サンフランシスコ在住電子演奏作曲演奏家，ブルブライト・アーティスト・イン・レジデンス助成により来日），司会と逐次通訳，平成11年（1999年）6月17日，慶應義塾大学・三田・北新館.
14. 慶應義塾大学アートセンター研究公演企画・司会，「蔵族（チベット族）民族芸能の夕べ―中国雲南省の秘境・奔子欄に芸能の源を辿る」，司会，平成11年（1999年）10月21日，慶應義塾大学・三田・518番西館ホール.
15. 慶應義塾大学通信教育部・夜間スクーリング『総合講座』企画コーディネーター：「先進技術社会を生きる―医療から芸術・メディアまで：文化へと拡がる科学と現代人の人間観をめぐって―」，平成11年（1999年）9月22日～12月8日（9回分講座），慶應義塾大学・三田・519番教室.
16. 学部生むけ企画（三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム）「民族音楽の一世紀」講師・徳丸吉彦（お茶の水女子大学・人間文化研究科長），企画・司会，平成11年（1999年）12月7日，慶應義塾大学・三田校舎.
17. ラジオたんぱ 慶應義塾の時間「人間科学入門」8回分担当講師，平成12年（2000年），ラジオたんぱ.
18. 学部生むけ企画（三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム）「天龍を舞う―理想郷を語る・踊る」講師・田中泯（舞踏家，舞踊資源研究所主宰），企画・司会，平成12年（2000年）9月26日，慶應義塾大学・三田・421番教室.
19. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『ユートピアの期限』コーディネーター）「愚者の楽園」，講師・畑中純（漫画家），司会，平成12年（2000年）12月5日，慶應義塾大学・三田・444教室.
20. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『ユートピアの期限』コーディネーター）「未来構想の理論」講師・見田宗介（東京大学名誉教授，共立女子大学教授），司会，平成13年（2001年）1月9日，慶應義塾大学・三田・444教室.
21. ラジオたんぱ 慶應義塾の時間『からだをめぐるイメージと文化』4回分企画コーディネーター，1月5日と1月12日（「身体観にみえる文化的背景―カルチュラル・スタディーズの複合領域から」小川葉子理工学部専任講師と宮坂敬造）），1月19日と1月26日（「対談と質疑：からだは何を伝えるか―文化精神医学の最近の動向から」江口重幸・武蔵野病院医長と宮坂敬造）放送分，平成13年（2001年）1月，ラジオたんぱ.
22. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『幸福の逆説』コーディネーター）「道化の幸福」講師・井田邦彦（ミラノ在住演出家，ルコック式演劇研究・教育），平成13年（2001年）10月2日，

慶應義塾大学・三田・444教室.

23. 三田哲学会講演会／オーストラリア大使館文化広報部後援・人間科学コロキュアム企画:「オーストラリア先住民の演劇の歴史とその社会的機能」, 講師・Wesley Enoch（オーストラリア先住民劇作家, 演出家), 企画・逐次通訳・司会, 平成13年（2001年）11月1日, 慶應義塾大学・三田・三田メディア・センターAVホール.
24. 慶應義塾大学通信教育部・夜間スクーリング『総合講座』企画コーディネーター:『二〇世紀と「トラウマ／心的外傷」』(2002年9月から12月8日までの9回分講座), 平成14年（2002年), 慶應義塾大学・三田・519番教室.
25. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『リスクの誘惑』コーディネーター)「UNKNOWNの誘惑―情報を基本とした軍事における革命と非対称戦」講師・江畑謙介（軍事評論家), 司会, 平成14年（2002年）12月10日, 慶應義塾大学・三田・444教室.
26. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『リスクの誘惑』コーディネーター)「即興的身体のリスク」講師・田中泯（舞踏家), 平成14年（2002年）12月17日, 慶應義塾大学・三田・444教室.
27. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『情の技法』コーディネーター)「情の身体表現―舞踊の技法:『江戸のかたち』（ダンス実演）を事例に」講師・石黒節子（お茶の水女子大学教授/舞踊家: 舞踊表現行動学), 石黒ダンスシアター公演「江戸のかたち」, 出演: 石黒節子, 若松武史, 山火わか子, 指宿ひとみ, 雨宮博美, 糟谷節子, 秋田有希湖, 岡野絵理子 他（三田哲学会・人間科学フォーラム共催), 平成14年（2002年）6月10日, 慶應義塾大学・三田・北新館ホール.
28. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『情の技法』コーディネーター)「感情の対象について―オペラ「カルメン」を読む―」講師・小林康夫（東京大学教授: 表象文化論, 現代哲学, フランス文学), 司会, 平成14年（2002年）10月17日, 慶應義塾大学・三田・444教室.
29. 学部生むけ企画（慶應義塾大学文学部共通講義『情の技法』コーディネーター)「『弱きもの』の復権と世界の救済」講師・上田紀行（東京工業大学助教授: 文化人類学), 司会, 平成14年（2002年）11月18日, 慶應義塾大学三田校舎444教室.
30. ラジオたんぱ 慶應義塾の時間『身体表現と文化―舞踏を例として』8回分講座の企画コーディネーター（実際担当分: 2月3日「身体表現と文化」講師・宮坂敬造, 2月11日「身体表現とジェンダー」講師・小林嵯峨, 宮坂敬造。2月12日「舞踏と異文化接触」講師・和栗由紀夫, 宮坂敬造, 2月16日「グローバル時代と身体表現」講師・宮坂敬造), 平成16年（2004年), ラジオたんぱ.
31. 三田哲学会講演会「アメリカ大統領選挙をどう理解するか」講師・ウィリアム. O. Beeman ブラウン大学文化人類学教授, 司会, 平成16年（2004年）11月1日, 慶應義塾大学・三田・東館4階研究会議室.
32. 「女優吉行和子講演会――フィクションを生きる」司会聞き手担当, 平成17年（2005年)1月18日, 慶應義塾大学・三田・北館ホール.
33. 三田哲学会講演会／人間科学コロキュアム企画・司会討論,「文化を超え出でる身体のかたち――ダンス訓練・臨床的身体との対話を通じて: 講師 ジュネーヴ在住インド古典舞踊家・ダンス療法家Sujatha Venkatesh氏」, 司会, 平成18年（2006年）7月11日, 慶應義塾大学・三田・313教室.
34. 人間科学専攻・映画上映会「イタリア映画の巨匠, アゴスティの世界を観る語る―人間科学から

みる文化と映像，精神医療の視点から」，企画・実行・司会，平成26年1月14日，慶應義塾大学・三田・北館ホール．